

## 密厳流ご詠歌の伝承にみる「伝統」

——昭和初期における仏教教団の布教活動をめぐって——

新堀 敏乃

本稿は、ご詠歌という仏教音楽が、昭和初期に仏教教団（以下、教団）によって伝承され始めた経緯に着目し、その伝承形態の成立過程を明らかにすることを目的とする。なお、本稿では真言宗智山派の教団が伝える密厳流のご詠歌を対象とする。

ご詠歌は現在、主に仏教寺院で伝承されている。各寺院では僧侶が在家信者にご詠歌を教えており、その伝承は教団による教化の一手段として機能している。こうした教団によるご詠歌の伝承は、昭和初期に在家信者への啓蒙的な布教を目的として開始された。

昭和六年、智山派の教団は、民間で伝承されていた大和流ご詠歌に触発されて密厳流を創立した。創立に際して教団は、ご詠歌の起源を「伝統」的な声明に求めて、「俗謡」とみなされていたご詠歌を正統的な仏教音楽へ昇華させようとした。そして、以下に示すようにご詠歌の伝承形態を再編した。

第一に、従来は口伝に拠っていた節を楽譜に記して、伝承の固定化と画一化を図った。その際、ご詠歌の起源が声明にあることを主張するために、声明の「伝統」的な楽譜がモデルとされた。第二に、僧侶の階級制度を模した「教階」と呼ばれる制度をご詠歌の伝承に導入した。これは、日本の諸芸能に見られるような家元制度に類する伝承組織であった。

このような伝承形態の再編によって、ご詠歌のうたい方は固定化・画一化されたと同時に、ご詠歌は声明のような高尚な儀礼音楽と低俗な娯楽との中間に位置する稽古事として普及することに成功した。そして、ご詠歌をうたい継ぐことが信者の修行課程とみなされるようになり、教団はご詠歌という「伝統」的な仏教音楽の伝承を通じて、信者を獲得することに成功した。